

7-2 ヒジキ

担当：松田成史・福本一彦（養殖・漁場環境室）

実施期間：平成 24 年度～（平成 25 年度予算額：豊かな海づくり事業 2,289 千円のうち一部）

目的

これまで本県沿岸に大量にありながら、ほとんど利用されてこなかった有用海藻を素材に、漁業者による 6 次産業化（一次加工・販売）によって付加価値を見出し、漁村に新たなビジネス（海産葉っぱビジネス）を創出するための技術的支援を行う。ヒジキにおいては天然種苗を用いた港内養殖について検討する。

昨年度の試験では 1～2 月に冬季波浪の影響と思われる生長停滞があったことから、今年度は冬季波浪を避けた 3 月中旬からの短期養殖の可能性と種苗の適正な挟み込み方法について検討した。

方法

ヒジキ短期養殖の可能性を検討するため、平成 25 年 3 月 19 日に赤碕町地先で採集したヒジキの苗を養殖用ロープ（かき 1 番 14mm）に挟み込み（図 1）、同日中に養殖ロープを赤碕西港西防波堤内側に図 2 のとおり設置した。この際、苗の適正な挟み込み方法を検討するため、①仮根部有り（図 3）・5cm 間隔、②仮根部有り・10cm 間隔、③仮根部無し（図 4）・5cm 間隔、④仮根部無し・10cm 間隔の 4 種類の方法で養殖用ロープに苗を挟み込んだ。平成 25 年 4 月 15 日に中間測定（全長のみ）を行い、同 5 月 16 日に収穫し（養殖期間 58 日）、全長と収穫重量を測定した。



図 1 苗の挟み込みの状況
（余った苗を試験範囲外に挟み込んでいるため数が多く見える）

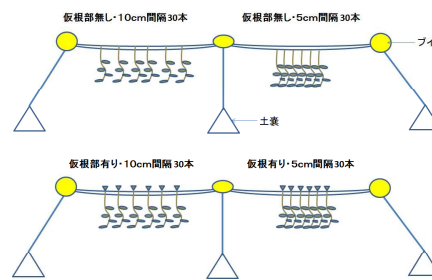


図 2 設置状況の模式図



図 3 仮根部有りの苗



図 4 仮根部無しの苗

結果および考察

図5に養殖期間中のヒジキの生長、表1に各試験区のヒジキの収穫量を示した。

仮根部の有無では、仮根部の無い試験区が仮根部のある試験区よりも生長が良かった。仮根部有りの区の方が流れ藻の絡みつきが多かったため、藻体がちぎれるなどの影響があった可能性がある。一方、苗の挟み込み間隔では明瞭な差は見られなかった。収穫重量では③仮根部無し・5cm間隔が8.29kg/mと最大になり、仮根部有りの区でも10cm間隔より5cm間隔の方が1mあたりの収穫量が多かったため、苗の挟み込み間隔は5cm間隔でも問題無いと思われる。

また、昨年度の試験のヒジキ収穫量は最大でも0.76kg/mだったが、今年度のそれは最小でも2.48kg/mであった。このため、冬期の波浪が激しい鳥取県の海域では、波浪の影響の少ない3月中旬からの短期養殖のメリットが大きいと思われた。

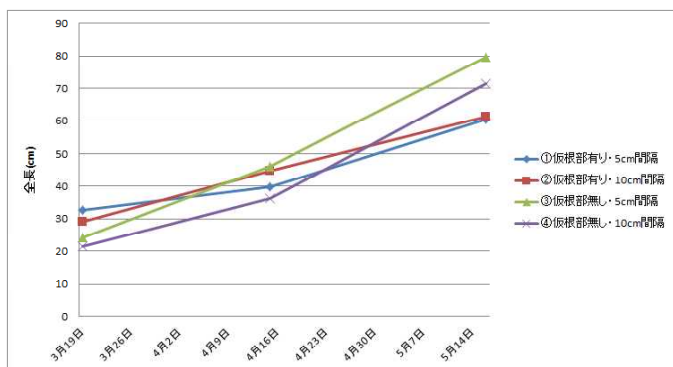


図5 養殖期間中のヒジキの生長

表1 各試験区のヒジキの収穫量

試験区	収穫量(kg)	養殖ロープ長(m)	養殖用ロープ1mあたりの収穫量(kg/m)
①仮根部有り・5cm間隔	5.38	1.5	3.59
②仮根部有り・10cm間隔	7.44	3	2.48
③仮根部無し・5cm間隔	12.44	1.5	8.29
④仮根部無し・10cm間隔	11.90	3	3.97

成果と課題

天然種苗を用いたヒジキ港内養殖は養殖期間を短期化することで収穫量が増大し、事業化に向けてほぼ問題ない段階になった。一方で、ヒジキは水揚げ後の加工に手間がかかることが問題となってきている。